The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Corporeality during Wartime in Philip Roth’s Late Works |
| Author(s) | 近藤, 佑樹 |
| Citation | 大阪大学, 2021, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/82268 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　近藤佑樹　） | |
|---|---|
| 論文題名 | Corporeality during Wartime in Philip Roth's Late Works<br>（フィリップ・ロスの後期作品における戦時下の身体性） |

論文内容の要旨

本論文は、フィリップ・ロスによる、戦争を扱った後期作品における現代戦争の諸相を、主に「身体性」という観点から読み解く。ロスはデビュー作で既に全米図書賞を受賞するという輝かしいスタートを切った作家であると同時に、引退まで質の高い作品を発表し続けた多作な作家でもあった。彼のキャリアにおける最後の10年間についても、決して創作のペースを落とすことはしなかった。本作で扱う作品群も、その10年間で発表された作品である。
彼はその10年間で、イラク戦争や朝鮮戦争など、今まで扱ってこなかったアメリカの戦争を取り上げる一方、第2次世界大戦という、現代アメリカについて語る上で極めて重要な戦争もアプローチを変えて繰り返し描いた。本論の分析対象となる4作は、チャールズ・リンドバーグが第二次世界大戦下に大統領となる混乱の時代を少年時代のフィリップ・ロスの目から描いた改変歴史小説『プロット・アゲンスト・アメリカ』(2004)、朝鮮戦争が起こっている中でのキャンパス・ノベル『インディグネーション』(2008)、ロスの分身とも言えるザッカーマンを主人公としたシリーズの最終作『エグジット・ゴースト』(2007)、第二次世界大戦下のポリオ集団感染をテーマにした、ロス作品の最後を飾った『ネメシス』(2010)である。
ロスの戦争とは、大別して、字義通り、そして比喩的なレベルという2つのレベルから成っており、彼の小説における登場人物たちは、複数の次元で様々なコンフリクトに対峙しなければならない。それは時に見えないウイルスの大蔓延かもしれないし、厭戦ムードのアメリカにおける反ユダヤ主義的暴動かもしれないのだ。
そして、本論では身体性に注目するのだが、その上で焦点化されるのは、いわゆる社会一般で「健康」「正常」とされる状態とは対極にある状態である。小説の背景に戦争がある以上、登場人物たちはしばしば片足を失ったり、予期せぬ形でウイルスに感染したり、陰惨な形で戦死したりすることになる。
また、身体性を意味する単語”corporeality”は、”corpo-reality”と区切れば、「身体の持つリアリティ」という解釈も可能であるものとして議論を進めた。身体とは、自らの認識を否が応でも定める、具現化した現実のリマインダーでもあるため、その身体に刻印されたものを探ることは戦争が物語るものを解析する一つの手段ともなりうる。
このように、本論の目的は、ロスの描いた戦争の意味に迫るために、彼の後期作における戦争描写と、登場人物たち（「兵士たち」）の身体性との関係性を明らかにすることだ。
第1章では、『プロット・アゲンスト・アメリカ』が描く、別のアメリカの歴史における戦時下の混乱を、フィリップ少年が体験することになる恐怖を起点として議論を進めた。フィリップ少年を襲う恐怖は、大別すると大統領が不在でありながら同時に彼の影響力が国内では遍在していることによる、精神的に与えられる恐怖、彼のいとこアルヴィンの失われた脚を巡る身体的側面から生じる恐怖、そしてユダヤ系アメリカ人をターゲットにした暴動による、直接的な生存を巡る恐怖などが挙げられる。そして、そういった彼の恐怖と関連付けられる、アルヴィンの義足を巡る描写や、いささか唐突に挿入される終盤の展開に関する解釈をデリダの「代補」の概念を援用しながら議論した。
第2章では『インディグネーション』を分析した。本作はロスが初めて朝鮮戦争を時代設定に明示的に組みこんだ作品となる。マーカス・メスナーの身体性がいかに「切断」と「接続」的現象を伴っていくのかという点から考察を進め、この「切り離される」及び「つながれていく」という不可抗力的な二つのベクトルに注目することで、全く知らない土地で起こったマーカスの死、そして彼の死に方は孤立した現象ではないことが明らかにする。複数の「切断」という象徴的な現象を介して、オリビアや自身の父親など、複数の人物及び事象が皮肉にも接続していき、マーカスの身体は引き裂かれ、露出されることになる。
そして、そこには生き延びることで考えられる、自分のアイデンティティを巡る問題、というロスの過去作品に見出せるような問いももはや無効化され、文字通りの戦争の前に属性は抹消され、敵も味方も顔なき兵士と化す。
この「切断」と「接続」という正反対の事象が、人間関係といった事象から、一人の人間の戦死という事象につながるという流れを伴って交互に展開し、最終的には「切断」で終わる、という構図は、マーカスが「生者」と「死者」

という二項を行き来し、結末部分でマーカスは実際に戦死する、という構図と共振する点があると言え、このタイトルの「憤り」とは彼を取り巻く複雑な状況を反映しており、多層的な意味合いを持つことを指摘した。

第3章では、長きにわたってロスが取り組んできたネイサン・ザッカ―マンが主人公のシリーズの最終作『エグジット・ゴースト』を扱った。ザッカ―マンがやむを得なくニューヨークに帰還するが、そこで彼が自らの過去と対峙せざるをえなくなる。そこで本章では本作を彼の周りの環境に病、その中でも特にガンの表象や、本作のテーマでもある政治的混乱、つまり2004年大統領選のブッシュ再選やイラク戦争などの描写を通して分析し、ザッカ―マンの人生と、病及び戦争のメタファーがいかに関係しうるのか考察する。

そして最後にロスの分身であるザッカーマンがいかに自らの物語から退場し、イラク戦争やテロなど、アメリカの抱える問題から離脱するかを明らかにした上で、作家ロス本人は依然としてアメリカの戦争を描くことになることを指摘した。

第4章では、ニューアークでのポリオ集団感染を題材にした、『ネメシス』を扱った。主人公が最終的に逃げ込むことになる、キャンプ場という場所は戦争及びポリオの避難先であるどころか悲劇的な展開に直結する呪われしトポスであったし、ポリオウイルスの恐怖は、ユダヤ系への恐れや差別意識（ポリオに感染しうる、けがれた存在としてみなす）を増幅するものになる。そして、実際の戦場には行けなかった引け目から、良き「兵士」であれ、という強迫観念にかられ、このポリオ・パニックを、一種の戦争としてメタフォリカルにみなす思考の枠組みにとらわれてしまう。その結果、ポリオに実際に感染した主人公バッキーは、そこから立ち直る機会を自ら放棄してしまうことになるのだ。そこで、彼に必要だったのは、そういった事態へのカウンターとしてのワクチンのような類の発想の転換であったこと、つまり、敵とみなされる対象を殲滅するのではなく、その一部を内面化することでこそ苦境を乗り越えられうるということを論じた。

結論では、ロスの戦争が持つ意味とは何であるのか今までの議論を3点に大別した。まず、人間が「代補」的存在になりうることを指摘した。一度共同体の紐帯から零れ落ちた人間は、欠落したパーツと化してしまい、彼らが帰還しても戻る場所がもはやないという現実に直面することになるのだ。

また、ロスの戦争において、「境界」は、ほぼ存在しないに等しく、その論理において、内と外の概念は成立しえない。つまり、それは例えば「逃げ込んだ先」にも戦争がその者を待ち受けているということも意味しうる。『インディグネーション』では、アメリカのありとあらゆるところから、逃避を試みた結果、主人公は朝鮮戦争の戦火に巻き込まれる。『ネメシス』でも、サマーキャンプこそ彼が逃げ込んだ場所だと思っていたのだが、そこで集団感染が起きてしまう。結果的にはそこは感染の爆心地と化したのだ。『エグジット・ゴースト』の場合、逃げ込んだというよりも、新しく足を踏み入れた先に待っていたのは、イラク戦争や9.11同時多発テロが人々の記憶にまだまだ新しい、大変混沌としたニューヨークの現状だった。ロスが描いてきた戦争とは、このように、戦時に想定される内側と外側（戦場とそれ以外の安全な場所）という境界を溶解させ、逃げ場を決して作ろうとはしないものである（自分は特権的に安全な状況にある、と後ろめたくも想定してしまうことこそがロスの物語世界においては危険なことである）。

そして、ロスの描いた戦争とは、いわば宿敵(ネメシース)と戦い続けることに他ならない。しかし、その宿敵が、外国に存在しないとしたら、外側にいる者ではないとしたら、どうだろうか。あるいは、脅威なるものが、自分の最も身近なところにあるものだとしたらどうなるだろうか、という思考実験をロスは近年の作品で試みてきたと言えるだろう。たしかに、アメリカ本土は大戦の戦火に巻き込まれることはなかった。しかし、戦争とは、実際の爆弾が国土に投下されずとも、兵士たちが上陸せずとも、実害をもたらすことをロスは繰り返し描いていた。ロスの作品が暴き出すのは、アメリカ人が立ち向かうべきは、必ずしも外部の宿敵ではないという皮肉な実情であり、国内のいびつな側面をあぶりだすのはやはりアメリカそのものということなのである。

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　近藤　佑樹　） | | | |
|---|---|---|---|
| 論文審査担当者 | | （職） | 氏　名 |
| | 主 査 | 教授 | 渡邉　克昭 |
| | 副 査 | 教授 | 貴志　雅之 |
| | 副 査 | 教授 | 畑田　美緒 |
| | 副 査 | 教授 | 中村　未樹 |
| | 副 査 | 関西外国語大学教授 | 杉澤　伶維子 |

## 論文審査の結果の要旨

本論文"Corporeality during Wartime in Philip Roth's Late Works"は、現代アメリカ作家の巨匠の一人、フィリップ・ロスの後期作品における戦争の諸相を主に「身体性」という観点から読み解き、５０年余りの長期にわたる彼の作家生活における最後の10年間において、戦争をめぐる表象がいかに前景化され、従前の作風にどのような捻りを加えているかを、綿密なテクスト読解の実践を通じて浮き彫りにした好論文である。晩年のロスは、自らが断筆宣言を行う直前まで、イラク戦争や朝鮮戦争など、彼がそれまで描くことのなかったアメリカの戦争を取り上げる一方、第2次世界大戦についても多様なアプローチを用いて繰り返し描き続けた。本論文の独創性は、ロスの最晩年の４作を集中的に取り上げ、彼が描く字義通りの戦争と比喩的な「戦争」という二つのレベルにおいて、主人公にもたらされるコンフリクトを、傷ついた身体表象が孕みもつリアリティとの絡みにおいて精緻に論じることにより、これまで注目されることのなかったロス文学の特質を新たな視点から炙り出そうとしたところにある。

本論文が主として分析の対象としたのは、リンドバーグ大統領が誕生する恐怖の時代を少年フィリップの目から描いた歴史改変小説『プロット・アゲンスト・アメリカ』(2004)、朝鮮戦争中のキャンパス・ノベル『インディグネーション』(2008)、ロスの分身とも言えるザッカーマン・シリーズの最終作『エグジット・ゴースト』(2007)、第二次世界大戦下のポリオ集団感染をテーマにした最後の作品『ネメシス』(2010) の４作である。

本論文は、身体性を意味する"corporeality"が、"corpo-reality"、すなわち「身体がもつリアリティ」でもあることに着目し、身体に刻印されたものを検証することが、戦争の物語るものを解析する一つの手段となりうるというスタンスを一貫して保持している。そのような視座に立ち、いずれの作品の考察においても、登場人物である兵士たちの肉体の欠損や陰惨な死や感染といった身体の不全性が鮮やかに焦点化され、戦争を代理表象する身体的リアリティが、恐怖やトラウマの惹起という点において、戦場と安全な場所を区切る「境界」をいかに無効化するかを緻密に分析しており、ダイナミックな思考の軌跡が窺える。

第1章は、問題作『プロット・アゲンスト・アメリカ』が描くリンドバーグ政権期のパラレル・ワールドにおいて、ユダヤ人少年フィリップが体験する恐怖に焦点を絞り、戦場で負傷して義足で帰還した従兄弟のアルヴィンの失われた脚をめぐる少年の嫌悪感が、姿を見せぬからこそ大統領が醸し出す反ユダヤ主義的風潮やユダヤ系アメリカ人を標的にした暴動と相まって、いかに義足に特別な意味合いをもたせているかを、ジャック・デリダの「代補」の概念を援用しつつ読み解いた野心的な論考である。「切り株」のように失われた脚に取って代わり、それを補うがゆえに不在性をかえって顕在化させる義足が含み持つ意味を、比喩的な意味やメタフィクショナルな意味をも含めて広く追求し、欠損と補充が織りなすダイナミズムとその限界を鮮やかに描出している。

第2章は、ロスが初めて時代設定に朝鮮戦争を組みこんだ『インディグネーション』を俎上に載せ、戦場で横死する主人公マーカス・メスナーの身体性が、どのように「切断」と「接続」に彩られてきたかを分析し、引き裂かれた彼の身体が恋人オリビアや父親をめぐる諸々の事件といかに関わるかを論じた独創性に富む論考である。筆者は、「切断」と「接続」という相反する事象が、主人公をめぐる人間関係において増幅するのみならず、彼の身の上においても交互に展開し、最終的には「切断」で終わるという構図に、生死を彷徨った挙句戦死した主人公の姿を象徴的に読み取っている。そこには、生き延びることによって自己のアイデンティティを確立するという、ロスの従前の作品に見られる個人主義的姿勢はもはや見られず、敵も味方も顔なき兵士と化してしまう戦争をめぐるロスの「憤り」が、多層的な意味を含みつつ、表出しているという結論は説得力に富む。

第３章は、ロスが長年取り組んできたザッカーマン・シリーズを締め括る最終作『エグジット・ゴースト』を扱うことにより、ロスの分身であるザッカーマンが、前立腺癌のためニューヨークに帰還することになり、いかに自らの過去と対峙せざるを得なくなったかを、癌や戦争の表象やメタファーを通して炙り出そうとした優れた論考である。2004年大統領選のブッシュ再選、イラク戦争などが引き起こす政治的混乱から離脱してやがて退場を余儀なくされる自らの過去に、人生の終焉を迎えつつあるザッカーマンがいかに向き合ったかを、多角的かつ的確に論証している。そのうえで、作家ロス本人は、依然としてアメリカの戦争を描くことになるという分身と現実の作家のギャップが鮮やかに焦点化されている。

第4章では、ニューアークでのポリオ集団感染を題材にした『ネメシス』を扱い、主人公バッキーが逃げ込むサマーキャンプというトポスが、戦争からの避難先であるどころか、ポリオウイルスの感染の爆心地と化し、ユダヤ系への恐れや差別意識を助長していくさまを緻密に分析している。実際の戦場には行けなかった引け目から、ポリオ・パニックを一種の戦争としてメタフォリカルに捉えるバッキーが、自ら感染することにより、そこから立ち直る機会を放棄してしまう点に着目し、彼に必要だったのは、敵とみなされる対象を殲滅するのではなく、そうした非常事態に対処するワクチンのような類の発想、すなわち、その一部を内在化することであったのではないかという考察が、説得力をもって提示されている。

結論部分では、ロスの描く戦争では、1)人間が「代補」的存在になりうること、2)「境界」は、ほぼ存在しないに等しく、内と外の二項対立的概念は成立しえないこと、3)宿敵や脅威が、必ずしも主体の外部ではなく最も身近な内部にあり、それらは合衆国の歪な姿を逆照射しているという、説得力に富む議論が明晰に導き出されている。

問題点としては、デリダを援用した「代補」についての論述が必ずしも十分ではないこと、扱った作品の選定基準、字義通りの戦争と比喩的な戦争についての論点整理の曖昧さ、論文全体を俯瞰したさらなる骨太の結論の必要性などについて、審査委員から指摘があった。だが、全体としてそうした問題点は、この論文の学術的価値を決して損なうものではない。執筆者がこれまで発表した学術論文はすべて既に査読付きの主要な学会誌に掲載され、博士前期過程の在学中に執筆者が日本アメリカ文学会関西支部奨励賞を受賞したことは、何よりも研究者としての卓越した力量を示す証左となろう。日本アメリカ文学会全国大会における英語での研究発表ならびに、明晰な英文で書かれた本論文は、執筆者の優れた英語運用能力を余すところなく示している。

本論文は、戦争と身体性というテーマでほとんど論じられることのなかった独創的なテーマの発見、緻密なテクスト分析、実証性に富む議論の展開により、フィリップ・ロス批評の新機軸を打ち出した論考として高く評価できるのみならず、現代アメリカ文学・文化研究への寄与も顕著である。上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。